

週刊 夢の窓 No.10



むうにい

## コンタクトレンズを勧められる

---

このところ視力が落ちてきたので、メガネを新調しに、近所のメガネ店へと行く。

「すみません、新しいメガネを作りたいんですけど」わたしは店員に声をかけた。

銀縁メガネの、いかにも神経質そうな男性店員が、ニコニコしながら対応する。

「はい、ようこそおいで下さいました。どんな『新しいメガネ』がお望みでしょうか？」

「えーと、視力が落ちー」

わたしが説明しようとする、片方の手で制止し、

「あ、お待ちを。わたくしがドンピシャリ、見事当ててみせましょう」

店員は、わたしを立たせたり座らせたりし、さらには前後、左右に回って、じっくりと観察を始める。

「ふむふむ、わかりました。お客様の欲してらっしゃるメガネというのは、ズバリ、『遠近反転メガネ』でしょうっ！」

そう言うと、店の棚から、1本のメガネを取り出す。

「まるで双眼鏡ですね、これ」思わず見入ってしまう。

「遠くの物が近くに見え、近くの物が遠くに見える、そんな素敵アイテムでございます」店員は自慢げに説明する。

「そんなの要りません。何の役に立つんですかあ？」

「役に立つ？ はて、世の中に役に立つものなど、そもそも、どれくらいあるのでしょうか。その時はいいと思った、けれども、すぐに不要になってしまう、はい、さようなら。そんなものばかりじゃございませんか」

店員は熱弁をふるい始めた。わたしはただ、メガネを作り直しに来ただけなのに。

コホン、と軽く咳払いをして、こちらの話を聞くよう、さりげなく促す。

「えーと、他のメガネをお願いしたいんですけど……」

「あ、はいはい。どうやら、お気に召さなかったようですね。わかりました、では、こちらなどが良いでしょう」この店員は、人の話など、まったく聞かないらしい。「『伊達巻きメガネ』というものでして、南プロバンスで、今大流行の商品でございます」

「なに、これっ。伊達巻きにツルが突き差してあるだけじゃん。こんなもん、買うわけないでしょっ」わたしはついに大声を出した。

「まあまあ、そうお怒りにならずとも……。いったい、どうなされたというのですか」おずおずと尋ねる店員に向かって、わたしは今度こそキッパリと言う。

「だからっ！ 視力が落ちちゃったんで、メガネを新しくしたいんですっ」

店員はずり落ちたメガネを人差し指でちゃっと持ち上げると、ほっとした様子で答えた。

「なあんだ、そうだったのですか。それならそうと、もっと早くにおっしゃっていただければよろしいのに」

もう、怒る気力さえ失せてしまう。

「いっそ、メガネなどおやめになり、コンタクトレンズなんてどうでしょう？ 色々とはかどりますよ」

「コンタクトかあ……」実は、前からちょっと憧れていたのだ。

「ハードとソフトがありましてね。初心者には、ソフトの方がお勧めでございます」

「目に入れるとき、痛くないんですか？」

「ソフトなら、まったく痛くはありません」店員は断言する。

「ソフト、試してみようかなあ」

「使い捨てのものですと、お手入れも簡単ですし、トラブルも少なくてすみませんが」

「使い捨て？」わたしは聞いた。

「はい、数ヶ月使えるもの、数週間程度で捨ててしまうもの、各種ございます。お客様の場合、初めてということですので、毎日交換する、デイリー・タイプから始められることをお勧めします」

ふーん。コンタクトレンズにも色々あるんだ。

「じゃあ、デイリー・タイプのにしてみます」わたしは決めた。これで、煩わしいメガネともおさらばか。

店員はいったん、店の奥へと姿を消した。ほどなく、箱を抱えて戻って来る。

「お客様、こちらがそのデイリー・タイプでございます」

渡されたのは、直径が10センチほどもあるコンタクトレンズだった。

「意外と大きいんですね」わたしはまじまじと見つめた。

「こちら『インスタント・デリカット』という商品ですと、ユタ州からの直輸入品なのでございます。日本でも大変な人気となっております」

見れば見るほど、牛乳瓶の底である。

「いいですね、これ。気に入りました。とりあえず、3ヶ月分ください」

今日からわたしも、コンタクトレンズ生活だ。

## 懐かしい町

---

積み木を並べたようにカラフルな家々、リノリウムのようなつるつとした道路、なんだかとても懐かしい。

「どこかで見たような町なんだけどなあ」クルマ1台来ない辻の真ん中に立って、わたしはうーんと考えた。

等間隔に並ぶ電柱の上には、もれなく水色のポリバケツが載せられている。けれど、電線だけはどこにも見当たらない。

「ははあ、すべて地中ケーブルか、それとも無線送信式電源を使っているんだな。新興の電力会社はやるのが進んでる」

不思議なことに、路地という路地をすべて見知っていた。のぞかなくとも、1軒1軒の家の間取りまで、すっかりわかっていた。

それなのに、ここがどこなのか思い出せない。

「おかしいなあ、よく知っている町のはずなのに……」

ふらっと、小さな公園に寄る。水飲み場では、出しっ放しの水が、噴水のようにちょろちょろと吹き上がっていた。

隅に掲示板が置かれている。何か貼り紙がしてあるので、近寄って確かめてみた。

〔もうまもなく みんなが たのしみにしている、「きゃんでいまつり」が はじまります。おうちのひとに きゃんでいがたくさんはいる、おおきくて すてきな「きゃんでいぶくろ」を つくってもらいましょうね。〕

「ああ、もうそんな季節なんだ。今年も袋いっぱいにもらうぞっ」わたしはうきうきと胸を弾ませながら、そう独りごちた。

毎年、5月の終わりには、町内でキャンディを配るというイベントがあった。今の今まで、なぜだかそのことを忘れていたのだが。

すると、ここはわたしが子供に頃に住んでいた町なのだろうか？

もう1度辺りをじっくりと見渡してみる。まるで、自分の部屋にでもいるように、隅々まで把握できる。その気になりさえすれば、落ちていた小石の位置までも思い出せるほどだった。

公園を出て、表通りをぶらりと歩いてみる。行き交う人たちの顔にも、何となく見覚えがあった。知り合いというのではなく、テレビ・ドラマのエキストラでも眺めている感覚である。

道端に、小さな運動靴が落ちているのを見つけた。しゃがんで調べてみると、かすれたマジックで「さくら幼稚園 もも組 むうにい」とある。

「これって、幼稚園の時の……」

道の先を見れば、他にもハンカチ、おもちゃの指輪、半分に折れたクレヨンなど、点々と続いていた

。それらをいちいち拾いながら、わたしは道を進んでいく。

赤いリボンを結んだ麦わら帽子を拾ったところで、空き地に出た。

家と家とで囲まれた、小さな空間だ。

空き地いっぱい、切り取られたノートのページや画用紙が散らかっている。

ノートには、書きかけの物語が鉛筆で綴られていた。画用紙にはクレヨンで、色とりどりの稚拙な絵が描かれている。そうした「作品」が、積み上げられるようにして、ここに集まっていた。

すぐに思い出した。これらはすべて、わたしのものだ。

夢中になって、絵を見て回った。どれを手にとっても、当時の真剣な思いが蘇ってくる。たった今、描き上げたばかりのように。

何百枚目かを取り上げたとき、とりわけ感慨深い気持ちになった。

俯瞰で見た町だ。どこにもない、自分だけの町。こんなところに住んでみたい、そうした思いから作られた地図だった。

「ああ、そうか……」わたしはようやく気がついた。

幼い日、父に叱られたわたしは、せめて空想の中で家出をしてやろう、そう考えてこの絵を描いた。

わたしは、再びその町へとやって来ていたのだ。

## 真夜中の遊園地

---

蒸し暑い夜だった。たぶん、とっくの昔に零時を回ったはずである。それなのに、どうしても寝つけずにいた。

いきなり「おしりかじり虫」がやかましく流れ出す。

枕もとに置いた携帯の着メロだった。

「はい、もしもし」わたしは対応した。

「おうっ、おれだおれ」悪友の桑田孝夫だった。「なあなあ、起きてる？」

「起きてるよ。じゃなかったら、電話になんか、出るもんか。それと、いきなり『おれだおれだ』っていうの、やめたほうがいいよ。オレオレ詐欺だと思われるから」

「今から、遊園地行かねえ？ 夜の遊園地」桑田が誘う。いつもながら、わけのわからないことを言い出す。

「遊園地って、夜は開いてないんだよ。知らなかった？」嫌味を込めて言ってやる。

「んなこたあ、わかってるって。開いてねえから、こっそり忍びこもうって言ってんだ」

「すぐ、そんな無茶を言う。警備員だっているんだからね。見つかったら大変じゃん」

「それがさあ、警備員のいない遊園地を見つけたんだよ。夜になっても、管理する奴がだあれもいねえの」

「へー、それ、どこの遊園地？」つい、聞き返してしまった。

電話の向こうで、桑田のしめしめ、という顔が見えるようだったが、もう後の祭りである。

「巢鴨の庚申塚遊園地さ。とげ抜き地蔵の前で待ってるからよ、お前も支度して、すぐに来いよっ。じゃあなっ！」

「ちょっと、待って。ねえ、桑田、あの――」電話は切れていた。

仕方なく着替えると、通りまで出てタクシーを拾う。

「巢鴨商店街まで」わたしは運転手にそう告げた。

桑田は、とげ抜き地蔵にもたれかかって待っていた。

「よお、遅かったな」

「お地蔵様にそんな馴れ馴れしくすると、バチが当たるよ」わたしは忠告してやった。

「無事、遊園地に忍び込めますようにって、願を掛けてたんだ。賽銭も奮発して、50円玉を放ってやったんだぜ」

わたし達は、白山通りを渡って、ちょうど反対側にある「庚申塚遊園地」の前までやって来た。

「ねえ、桑田。ほんとに忍び込むの？ 止めたほうがいいんじゃない？」この期に及んで、わたしは逃げ腰だ。

そんなわたしに軽蔑するような目を向け、

「今さら何だ。ほら、そこの柵から中へ入れ」

しゅしゅと鉄の柵をよじ登る。桑田もその後が続いた。

夜の遊園地というのは、なんとも不思議な感じがするものだ。ところどころに非常灯が点いているきりで、他は真っ暗。昼間は喧噪を極めた同じ場所が、今や物音1つしない。

「電源盤は事務所の脇だ。そら、ブレーカーを上げるぞっ」言うが早いか、桑田はブレーカーを力いっぱい持ち上げた。敷地内のライトが順次点灯していき、後を追うようにして、観覧車、メリーゴーラウンド、びっくりハウスの豆球がちかちかと点滅を始める。

「何はさておいても、ジェット・コースターだろうっ」桑田はジェット・コースター乗り場へと走っていき、最前席へと陣取った。「おーい、むうにい。操作室に入って、始動ボタンを押してくれよっ！」

操作室に入ったものの、どれがそのボタンかわからない。

「どれーっ？ 何色のやつーっ？」窓から顔を出し、ジェット・コースターに向かって叫ぶ。

「緑のボタンなっ。いいかっ、それ以外のは触るなよ」桑田が叫び返してくる。

「これかな……」一番手前の緑のボタンを押す。乗車場の方で、ゴットンと音がした。

「オッケー、それだ、それでいいぞおっ」ジェット・コースターは滑るように走り出し、瞬く間に見えなくなった。暗い夜空の下、ぐわん、ぐわんと軋むレールと車輪の音が響く。時折、「ウッヒョオ〜ッ」とか「ヌワアッ！」などと、無気味な雄叫びが混じって聞こえてくる。まるで、この世のものとは思えない。

「大丈夫〜っ？」わたしは心配になって、大声で呼んでみた。けれど、戻ってくるのは「ダワワワ〜ン、ブオオオイ〜ッ！」という、奇妙な返事ばかり。何を言っているのか、さっぱりだった。

もしかしたら、助けを求めているのかもしれない。だとしたら、すぐに機械を止めなくては。

緑がスタートだったから、停止は赤のはず。

わたしは、叩き付けるようにして、停止ボタンを押した。

キキーッ！

両方の耳の穴から指を突っ込まれて、脳みそをぐりぐりとえぐられるような凄まじい音だった。

「桑田〜っ、止めたよーっ」

すると、頭上高くから絞り出すような声が降ってくる。

「なんでだぁ〜。どうして、止めるんだよお〜っ」

見上げると、ループの1番高いところで、逆さまになってぶら下がるジェット・コースター、それとバンザイをした格好の桑田の姿が。

「あれれ……。余計なことをしちゃったみたい」

## 引っ越しの手伝いをする

---

真夜中に散歩をしていると、まるでテーマ・パークのようにライト・アップされたマンションの前で、引っ越しが行われていた。

「こんな時間に酔狂な人だなぁ。どんな変人が、ちょっと見てやれ」

そう思い、トラックのそばで作業員にあれこれと指示を飛ばしている人物を覗き込む。

「あ……」とわたし。

「おや……」ほとんど同時に相手も口を開く。

友人の志茂田ともるだった。

「このマンションに越してきたんだ、志茂田」わたしは話し掛ける。「それにしたって、なんだってまた、こんな時間に？」

「引っ越しは夜に限りますよ、むうにい君。道は空いているし、何より、このこそそとした卑屈な感じがたまらんですよ」志茂田はそう言い、喉の奥でヒッヒッヒッと妙な声を立てる。

「ま、じゃあ引っ越し頑張ってるねっ」さっと手を振って帰ろうとするわたしを、志茂田は呼び止める。

「お待ちなさい、むうにい君。せっかくだから、手伝ってもらえませんか？」

「え〜っ」わたしは力仕事が大嫌いだった。

「まあまあ、そう言わずに。軽い荷物だけでいいですよ。手伝ってくれたら、牛丼でも奢りましょう。この近所に、新しい店ができたのですよ、むうにい君」

「また、牛丼か。まあ、いいよ。渋々と手伝うよ」わたしはあきらめて、腕まくりをする。

引っ越し業者達に混ざって、トラックの荷台に上がり込んだ。とにかく小さくて、軽そうなものを探す。

「それなんかどうだい？」業者の1人が、隅っこの小箱を指差した。

「あ、はい」持ってみると、ちょうどいい重さだった。箱には「わたしの恥ずかしいものあれやこれや」と殴り書きがしてあった。何が入っているんだろう……。

マンションのエントランスはとても広く、エレベーターが何基も並んでいた。志茂田の部屋は32階の突き当たりだというので、その階行きのエレベーターに乗らなくてはならない。

「この3つ目のエレベーターかな？」上りボタンを押す。

エレベーターの扉が開くと、蝶のモンスターがいきなり2体現れた。

毒々しい派手な色をした羽を、エレベーターいっぱいに広げ、横一列、きっちりと並んでいる。

蝶の頭上に吹き出しが浮かんだ。

〔蝶Aの攻撃！ 羽をばたつかせて、鱗粉を飛ばしてきた！〕

「けほっけほっー」鼻や喉がイガイガする。ベランダで布団を叩いて、煽り風で埃を吸い込んでしまったときのようだ。



続いて、もう1匹も攻撃を仕掛けてくる。

〔蝶Bの攻撃！ 触角から「怪しい電波」を放った！〕

普通、電波というものは目に見えないものだが、この蝶は違った。

紫色の大小の輪っかが、まるで「でんじろう砲」のように飛んで来る。

「痛いっ、イタタッ！」と言っても、体が痛いのではない。精神的にチクチクと突き刺さるのだった。

次はわたしの番だった。蝶達はじっと待っている。

反撃をするにはどうしたらいいのだろうか。こっちは「鱗粉」も「怪電波」も飛ばせない。

ふと、この「わたしのはずかしいものあれやこれや」の箱を開けたら、どうなるかな、と心をかすめた。

もしかしたら、世界が崩壊するとか、何かとんでもない事態を引き起こすかもしれない。時間が逆戻りを始めて、宇宙がなかったことになってしまう可能性だってあり得る。

けれど、どちらにしてもこのままではまずい。わたしはなんとしても、上の階へと行かなくてはならないのだから。

「えーい、開けちゃえっ！」蓋をとめていたクラフト・テープを、ベリリッと剥がすと、中身を蝶に向けた。

〔むうにいの会心の一撃っ！〕

2匹の蝶は、たちまちにして消え去った。ああ、やっとエレベーターに乗れる。

32階に上ってみると、志茂田が部屋の前でわたしを待っていた。

「ずいぶんと来るのが遅かったですね、むうにい君」

「それがさ、エレベーターで蝶のモンスターとエンカウントしちゃって。しかも、バトルまで繰り広げてきたんだ」わたしは説明する。

「あっはっはっ。そうでしたか、戦ってきましたか。それにしても、いきなり蝶と対戦とは」と志茂田。

「蝶って強いのか？」わたしは聞いた。

「もちろんですとも、むうにい君。それにしてもあなた、よく勝てましたね。どんな卑怯な手を使ったのですか？」

わたしは脇にかかえた小箱を、志茂田に差し出す。

「この中を見せただけなんだけど」

志茂田はまるで、ムンクの「叫び」そっくりに凍りついていた。

## ヘリコプターの免許を取りに行く

---

アマゾンで「タケコプター」を買ったら、「この商品を買われた方は、こんな商品も買っています」と言われる。

本物のヘリコプターだった。ジャスト1億円、とある。

「高っ！ 誰が買うのさ、こんな物」そう言い捨てながら、思わず「ショッピング・カート」に入れていた。

買ってしまってから、「あ、ヘリコプターの免許持ってなかった」と気づく。お届けは明後日、クロネコヤマトにて宅配、と記されていた。

「どうしよう、それまでに免許取らなきゃ」

ネットで調べると、近所の自動車教習所でも、ヘリコプターの操縦を教えてくれることが判明する。わたしはさっそく、申し込みに行った。

「すみません、ヘリコプターの免許を取りたいんですけど」受け付けに声を掛ける。

「あ、はい。それでは、こちらの書類に記入をお願いします」そう言って、数枚の用紙を渡された。

わたしはボールペンでさらさらと必要事項を埋めていく。書類を返すと、

「はい、結構です。費用の方ですが、300万円をいただきます」

「えっ……。高いんですね」アマゾンでポチって買ったヘリコプターは、月々6万円ずつのローンだ。教習代を併せて、計1億300万円かぁ。何年たったら、払い終わるんだろう……。

さっそく教習場へと連れて行かれるわたし。教官は渡哲也にそっくり。びしっと軍服のような制服に身を包んでいて、真っ黒なサングラスを掛けている。

教官は規律正しくも、どこか優しさを滲ませた声で言った。

「わたしが君を指導する。教場を出た後は、もう誰も君の面倒を見てはくれない。言い換えれば、今のうちに思う存分、失敗をしておくとおよしい。ぶつけても落としてもかまわない。ヘリの限界というものを、身をもって体感しておくんだ」

一般の自動車教習が行われているコースの横を通り、ゴミ置き場のすぐそばまでやって来る。

「いきなり実機というわけには行かない。まずは、こいつで練習だ」

乗るように促されたのは、デパートの屋上で見かける、子供用遊具そっくりのヘリコプターだった。機の横っ面には、剥がれかけたペンキで「すーぱーへり1ごう」とある。

わたしは「すーぱーへり1号」にまたがった。傍らをゆっくりと走りすぎていく教習車の運転席で、くすくすと笑う声が漏れる。

「先生、うんともすんとも動かないんですけど」わたしは言った。

「すまん、すまん。言い忘れていた。100円を入れて欲しい。それで50分間の搭乗ができる」

ポケットから財布を取り出すと、なげなしの100円玉を機械に投入する。

とたんに、ヘリコプターの練習機がガクン、ガクンと揺れ始めた。

「ああ、動きました、先生」

「うむっ……」教官は満足そうにうなづく。「今日から1週間、毎時間、これに乗ってもらおう。まずは基本からだ」

ヘリコプターが届くまでに、免許は取れそうもないな。

今年中に取得できるのかさえもわからない。そもそも、こんなことをやっていて乗れるようになるのか。先行きが心配になる。

教官はただ、黙って見守っているばかり。まるで顔の一部のように貼り付いたサングラスのせいで、何を思っているのか1つも読めない。

それでもわたしは、「すーぱーへり1ごう」の上で揺られているより他はなかった。

月々6万円、それと教習代300万円。今さらやめられない。

また1台、4輪教習車が笑いながら脇を抜けていく。

## 世紀の天体ショーが始まる！

---

もう間もなく、ブラック・ホールが、地球のすぐ近くを通り過ぎていくという。  
ワイドショーも週刊誌も、その話題で連日、持ち切りだった。

ツイッターでは、まことしやかなデマが拡散していた。

[B.Hが最大接近するとき、大気が残らず吸われてしまう。世界オワタ……]

[それどころじゃない。人もクルマも持っていかれちゃうんだ]

[NASAによれば、地球上に「事象の地平線」が出現するという。ワシントンなう]

なんにしても、世紀の天体ショーである。今を逃したら、この先一生、見るができないのだ。  
どうせなら、じっくりと観察をしたい。そこでわたしは、望遠鏡を買いに、近所のコンビニまで出掛けていった。

ところが、どこを探しても望遠鏡の「ぼ」の字すら見つからない。考えてみれば、コンビニにそんなもの置いてあるはずもなかった。

店の中でウロウロしているわたしを見て、店員がレジの向こうから迷惑そうに言う。  
「冷やかしなら、さっさと出ていってくれ！」

なんて感じの悪いコンビニだろう。わたしはムスツとして、店を出る。  
いったん家に戻ると、広告の裏に赤マジックででかでかと、「冷やかし始めました」と書いて、さっきのコンビニの自動ドアに貼り付けてやった。  
どうだ、思い知ったか。

そう言えば、隣の家的大学生が望遠鏡を持っていたっけ。彼は夜な夜な、3ブロック先にある女湯を覗くのに使っているのだった。

わたしはさっそく、借りに行った。  
「こんにちは。となりのむうにいですけど、あのう、今夜ブラック・ホールの観察をしたいので、望遠鏡をお借りできませんか？」

大学生はちょっと困った顔をした。  
「う～ん、あれ1台しかないんだよね。君に貸しちゃうと、今晚、女湯が覗けなくなっちゃうなあ」

そこでわたしは提案をする。  
「それだったら、銭湯の塀を乗り越えて、直接覗きに行ったらどうです？ 両方の目で見られますよ」  
「おおっ、そいつは思い付かなかった。なら望遠鏡は不要だな。よし、貸すよ。好きに使うといい」  
わたしは望遠鏡を抱えて、家に戻った。

いよいよ夜になり、遠く頭上からブラック・ホールの走り寄る、シュワン、シュワンという音が鳴り響く。

「今、この瞬間にも、日本中の人たちが空を見上げているんだろうな」わたしは感慨深く夜空を仰いだ。

月の裏側から、真っ黒な円盤状のものが近づいてくる。ブラック・ホールだ。

「来たっ、来た来たっ！」わたしは接眼レンズに目を押しつけて、夢中になって位置を合わせる。

望遠鏡の視野のど真ん中にブラック・ホールを収めると、食い入るようにして見つめた。

想像では、ただの真っ黒い影だろう、ぐらいにしか思っていなかったのだが、こうして観察してみるとそれは誤りだとわかる。

ブラック・ホールは、ほんのりと紺色をしていて、かすかに物の影が差していた。じいっと目を凝らすうち、次第に色形がはっきりしてくる。

ブラック・ホールの中には、狐と狸が住んでいた。

ちゃぶ台に向かい合って座り、仲よく湯豆腐をつついている。

## ガマガエルを履いて歩く友人

---

志茂田ともる、中谷美枝子、それにわたしの3人で、「ハリー・ポッター番外編」を観に、池袋へ向かう。

池袋駅に着き、電車から降りようと中谷が1歩踏み出したとき、悲劇が起きた。

「きゃっ！」中谷が叫び声をあげる。

ガマガエルが中谷の右足を、ふくらはぎの辺りまでゴックンと飲み込んでいた。

「何それ、ばかにでっかいガマガエルじゃん！」わたしはまじまじと見つめる。足を食われているというよりも、中谷の方がガマガエルを履いているみたいだ。

「あっはっはっ。相変わらず、人を笑わせてくれますね、中谷君」と志茂田。「『棺桶に片足を突っ込む』という言い回しこそありますが、『ガマガエルに片足』とは、まったく！」

中谷は足をぶんぶんと振って、何とかガマガエルを引き離そうとする。一方、ガマガエルの方も、何が何でも離れるものか、と食らいついたままだった。

「なんなのよ、こいつ。ほんと、ムカつくなあ！」それから志茂田に向きなおり、「あんたも、人を笑いすぎだよ。こんな大変な目に遭ってるっていうのに、ばっかじゃないの？」

「これは失礼しました、中谷君。でもですよ、この状況を見たら、誰でも腹を抱えてしまうのではないのでしょうか」

わたしは内心で、それに同意しかねていた。ただでさえ気味の悪いガマガエルなのに、こんなに大きくて、しかも人の足を飲み込んでいるのだ。

「仕方ない、このまま歩くか」中谷はガマガエルを履いたまま、ぱっこん、ぱっこんと歩き出した。

「あ、子供の頃、そんなふうに鳴くサンダル履いてたよ」わたしは懐かしくなって、思わず言った。

たちまち、中谷が怖い目で睨み付ける。

「なんなら、あんたにも履かせてあげようか、この『サンダル』っ」

シネマサンシャインは混雑していたが、なぜか「ハリー・ポッター番外編」だけは、ガラガラだった。

「これはラッキーでしたね、むうにい君。まるで、貸し切りのようじゃあ、ありませんか」志茂田は大喜びだったが、わたしと中谷は顔を見合わせる。

「それってつまり、映画がめちゃくちゃつまらない、ってことじゃないの？」と中谷。

「ねえ、志茂田。これやめて、他のにしない？ ほら、隣の館の『X-MENですね』とか」わたしも提案する。

けれど、志茂田は頑として意志を曲げないのだった。

「いいえ、今日はこの『ハリー・ポッター番外編』を観るということでやってきたのですよ、お二人とも。決めたことを守らずにどうするんです？」

志茂田は頭が固いので困る。

これ以上の抗議は無駄なので、「ハリー・ポッター番外編」のチケットを3枚購入する。

予想通り、映画は退屈極まりないものだった。

主人公のハリー・ポッターは、最近ではメガネをやめてコンタクトにしたという。そのことに対し、ハーマイオニーは「ハリーにはやっぱり、牛乳びんの底こそお似合いだと思うの」と意見を述べていた。

一方、ホグワーツ魔法学校は資金繰りが悪化し、経営困難に陥っていた。他国に分校として再建するか、いっそのこと、このまま廃校にしてしまおうという案まで出されているのだ。

わたしは中谷の耳もとでささやいた。

「NHKの安っぽい単発ドラマでも観てるみたいだね」

中谷もつまらなそうに、押し殺したあくびを洩らす。足を組んだ拍子に、例のガマガエルが前の席を蹴る。

ゲコッと大きな鳴き声が飛び出す。

映画の中では、悪の魔法使い・ヴォルデモートが、杖をひゅんっと振るった。するとたちまち、ぱつと赤いカーネーションの束に変わる。

続いて、マントをひるがえすと、どこに隠れていたのか、白いフクロウが数十羽、一斉に飛び立つのだった。

「なんで、『あのお方』が一発芸なんかしてるの？」わたしはまた、中谷にひそひそと言う。

「ああ、くだらない……」そう言って、足を反対側に組み直す。また、前の席をゲコッと蹴る。

反対側の席では、志茂田がすやすやと寝息を立てていた。

週刊 夢の窓 No.10

<http://p.booklog.jp/book/87371>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87371>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87371>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ